[head](koten.htm)（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>　　　宰主　上田啓之）

以下は、読書会に備え調べたこと、また、議論したことを、岩倉紙芝居館館主が独断で記載したものである。  
  
先進　第十一

１) 子曰先進於禮樂野人也後進於禮樂君子也如用之則吾從先進

zǐ yuē xiān jìn yú lǐ yuè yě rén yě hòu jìn yú lǐ yuè jūn zǐ yě rú yòng zhī zé wú cóng xiān jìn   
子の曰はく、先進禮樂に於て野人なり。後進禮樂に於て君子なり。如しこれを用ふれば則ち吾は先進に從はん。  
   
[義疏](http://www.minlun.org.tw/2pt/2pt-2-1/11.htm)によれば、先進とは五帝（黄帝、顓頊、帝嚳、堯、舜）以上、後進は三王（夏の禹王、殷の湯王、周の文王か？）となし、野人とは、質朴なこと。先進は、文質の質、後進は文となす。[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)では、野人は、郊外の民を謂う。君子は、賢士大夫を謂うなり、とみる。今日では、定公十四年（前496年）に孔子が魯を去る前に入門した者（子貢、子路、顔回、冉有、宰我、閔子騫、冉伯牛、仲弓、原憲、子羔、公西華など）を先進、それ以降の者（子游、子夏、子張、曽子、有若、樊遲、[漆彫開](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/rongo4.htm#漆彫開#漆彫開)、[澹薹滅明](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/rongo3.htm#澹臺滅明#澹臺滅明)など）を後進とするようだが、後進は孔子が魯に帰国する前ならば、放浪していた諸国で入門したとなろうか？如（も）し、之とは禮樂、これを用ふれば、仮定の問題としているが、先進に従ふ、が先生の立場。  
読書会：先進は野人、素朴で本質をわきまえた人。後進、君子なりは、華麗、華やかさがあるが、芯が通っていないような。昔の区切り、孔子のなかではきちんとした区切りがあり、完全にわかれた役割がある。昔の人は気持ちのこもった禮樂、中味のある禮樂を求めたが、今の人々は心無く形だけ修めようとする。

２）子曰從我於陳蔡者皆不及門也德行顏淵閔子騫冉伯牛仲弓言語宰我子貢政事冉有季路文學子游子夏  
zǐ yuē cóng wǒ yú chén cài zhě jiē bù jí mén yě dé xìng yán yuān mǐn zǐ qiān rǎn bó niú zhòng gōng yán yǔ zǎi wǒ zǐ gòng zhèng shì rǎn yǒu jì lù wén xué zǐ yóu zǐ xià   
子の曰はく、陳、蔡に於て我に從ふ者は皆、門に及ばざるなり。德行には顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、言語には宰我、子貢、政事には冉有、季路、文學には子游、子夏。  
  
於陳蔡とは、司馬遷、史記に曰く、「孔子、蔡に遷りて三歳。呉、陳を伐つ（BC489）。楚陳を救い、城父に軍す。孔子が陳蔡の間に在るを聞き、楚、人をして孔子を聘せしむ。孔子まさに往きて礼を拝す。陳蔡大夫謀りて曰く、“孔子は賢者、刺譏（せめそしる）ところ皆諸侯の疾にあたる。今は久しく陳蔡の間に留まる。諸大夫の設（計画し）行うところすべて仲尼の意にあらず。今楚は大国なり。来りて孔子を聘す。孔子、楚で用られれば、すなわち、陳蔡事を用いる大夫危し。”かくて、相ともに徒役を発し、孔子を野に囲む。行くを得ず、糧を絶つ。従者病み、興しえるなし。孔子、弦歌を講誦し、衰えず。」荒野で子路、子貢、顔回を順番に登場させその不満を述べさせた時のことである。義疏によれば、この結果一緒にいた門弟は時を失い、仕官に復及することも門に進むこともならず、道が行われないことを運命として、ただ聖人のみが時を安んじそこに従い得た、といふ。皆んな門に及ばず、孔子についてゆけなくなったとある。集註では、蓋し其の患難の中を相從いしを忘れざるなり、とあるが、皆という以上、孔子は完全に孤立したというのがこの実感であろう。司馬遷による子路、子貢、顔回と孔子の対話は、論語にはないものであるが、実に味わい深いものとなっている。

この章には子曰が無く、字（あざな）で呼んでおり、孔子の直接の言葉でないとされる。義疏によれば、孔子門弟三千人中の十人を以て四科と為す。德行、言語、政事、文學、范寧（晋339年－401年春秋穀梁伝集解）によれば、德行は人生の本、百行の美であり第一にあげられ、顏淵が筆頭となる。二科言語は、賓主相対する辞（ことば）、三科政事は、国を治める政（まつりごと）、四科文學は善き先王の文に典（のっと）ると為す。王弼（魏226年－249年）は弟子の才はこの十人に限るものでなく、その才の長じるところを挙げたもので、分類の基準としたものであるが、後世そこに序列を加えたものとなった。皇侃（梁488年―545年論語義疏）自身は次第に徳行が首となり、言語は君子の枢機（かなめ）といえど徳行が急、政事は人事を別けるもので言語より緩、文学は博学古文で前の三事より泰と序した。集註では、程子（程頤：北宋1033年-1107年）曰く、四科は乃ち夫子に陳蔡に從いし者のみ。門人の賢者、固より此に止まらず。曾子は道を傳えて與らず。故に十哲は世俗の論なるを知る、とある。十人とは陳蔡に從いし者という釈を持ち込んだ。子游、子夏という後進も参加しており、彼等は孔子の諸国放浪の中で弟子入りしたことになる。  
読書会：門に及ばずは、レベルに至らない、そういう意味ではなく、今はそこに居ないとされる。苦労していた人が、別に仕えたり今は一人もそこに居ないの義。言語は遊説する、政治家がもつべき巧みな舌。子貢が上手い。状況判断を巧みな言葉で行う。政事は政治に参加すること。文学は我々の想像する今の文学ではない。四書禮樂の注釈を加える、説明すること。子游、子夏の詩の解釈が後世に影響を与えている、共に説明して敷衍しようとする。四種類のなかで、徳行はやはり違う。仕事ができる、と人間ができるのちがい。

３）子曰囘也非助我者也於吾言無所不説

zǐ yuē huí yě fēi zhù wǒ zhě yě yú wú yán wú suǒ bú yuè  
子の曰はく、囘や、我を助くる者に非ざるなり。吾が言に於て、説ばざるところ無し。  
   
吾與囘言終日不違如愚退而省其私亦足以發囘也不愚（[以政篇9](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/isei.htm)）とあった。顔囘は先生の話を終日聞くも反問することがない。愚かなほどであるが、その私生活を見ると發するものがあり、愚かでない。話に反問せず何を聞いても説ばないことはない。顔囘はすべてを理解している、しかし、子曰不憤不啓不悱不發擧一隅不以三隅反則不復也（[述而篇8](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/jutsji.htm)）が先生の教育方針。鋭い反問があるから、先生自体も啓発されることがある、顔囘にはそれがない。先生もこれには困っておられた。  
読書会：見ているだけでは聞いているのみの顔回。でも、これほどすごい言葉、褒め言葉はない。言い方が逆説、反語みたいな言い方。全部よろこんで聞いている、で暗黙の評価。

４）子曰孝哉閔子騫人不閒於其父母昆弟之言

zǐ yuē xiào zāi mǐn zǐ qiān rén bú jiàn yú qí fù mǔ kūn dì zhī yán  
子の曰はく、孝なるかな閔子騫、人、其の父母、昆弟の言に閒せず。  
   
中国古代の孝行が特に優れた24人の故事を集めた元の郭居敬、「二十四孝」閔子騫(びんしけん)に、「彼の実の母は早くに亡くなり、父は後妻を娶って、子供が二人生まれた。継母はしばしば子騫をいじめた。冬、二人の異母弟には綿入れの上着を作ってやったのに、子騫には葦の花を入れた薄っぺらな服しか与えなかった。  
　ある日、父の外出に際して、子騫が車を引くことになったが、寒さで震えが止まらず、ロープを落としてしまったため、父にひどく叱られた。そのときちょうど、葦の花が破れた服の中から飛び出し、父は子騫が継母からいじめられていることを知った。  
　父は家へ帰ると、妻に暇を出そうとした。すると、子騫は跪いて、継母を許してあげるよう父に懇願して、こう言った。「母がいれば、寒い思いをするのは、私一人ですみますが、母がいなくなれば、三人の子供がみな凍えることになります」。  
　父はそれを聞いて感動し、子騫の言うとおりにした。継母もこれを聞いて、自分の過ちをひどく後悔し、それ以来、実の子のように、彼に接するようになった。（[大紀天](http://jp.epochtimes.com/jp/2007/09/html/d15065.html)）」とある。司馬遷は「大夫に仕えず、汚れた君の禄を受けず。」と評している。季氏使閔子騫爲費宰閔子騫曰善爲我辭焉如有復我者則吾必在汶上矣（[雍也篇7](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/yoya.htm)）人、其父母昆弟を閒（かん）するの言あらず、あるいは、人其の父母昆弟の言を閒（そし）らず、とも訓じられる。昆とは兄のことで、昆弟とは兄弟のこと。閒はjiānでは～と～の間、jiànでは隙間のあること、閒言jiàn yánとは古語で非難する言葉、仲たがい、言い合いをいふ。その事情を知っていた世間の人も父母や兄弟のことを非難することがなくなった。これは舜を彷彿させる孝であり、先生は孝なるかな閔子騫と申された。  
読書会：日本にはこのような親孝行物語はない。何か違った話、身の処し方のような話に思われる。中国では、忠孝を大事にし、家庭の中の孝が忠の源となると考える、それで、家庭も政事も治まる、それを論理的に体系化したのが朱熹。

５）南容三復白圭孔子以其兄之子妻之

nán róng sān fù bái guī kǒng zǐ yǐ qí xiōng zhī zǐ qì zhī  
南容、三たび白圭を復す。孔子以て其の兄の子をこれに妻す。  
   
白圭は詩の大雅の抑篇、「白圭の玷（かけ）たるは、尙磨くべし。斯の言の玷たるは、爲す可からず；白圭は欠ければ磨いて元通りにできるが、言の欠けたものはとりかえしがつかない。」南容はこの言葉を日に何度も繰り返していた。孔子はそれをみて、兄の娘を妻（めあは）した。言葉において慎重であった。子謂南容邦有道不廢邦無道免於刑戮以其兄之子妻之（[公冶長2](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koyacho.htm)）ともあった。  
読書会：何故兄の娘をこの人に嫁がせたのか。もっと優れた弟子もおられ、最高の弟子というなら、顔回という選択肢もある、今でいえば、学歴も家柄も性格もいい、という人を選んでいる。何故か？少年の丘がどうして孔家に入りえたのか、疑問がある。いづれにしても孔子は孔家嫡男、腹違いの兄に気を使っており、お兄さんにとっては非常にいい人に嫁がせた、すごく常識的な選択、顔回なら結婚する相手としては不向きという判断を下していたのではないか。お兄さんの足が悪かったということを聞くが、そういう事情もあって逆に孔家のほうから孔子を入れたということはないだろうか？

６）季康子問弟子孰為好學孔子對曰有顏囘者好學不幸短命死矣今也則亡

jì kāng zǐ wèn dì zǐ shú wéi hào xué kǒng zǐ duì yuē yǒu yán huí zhě hào xué bú xìng duǎn mìng sǐ yǐ jīn yě zé wáng  
季康子問ふ。弟子孰れか好學と為す。孔子對へて曰はく、顏囘なる者有りて學を好む。不幸にして短命にして死せり。今は則ち亡きなり。  
   
哀公問弟子孰爲好學孔子對曰有顏囘者好學不遷怒不貳過不幸短命死矣今也則亡未聞好學者也（[雍也篇2](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/yoya.htm)）とあった。哀公が問われたと同じ事を季康子も問うた。通例、君主に対する場合と比べると省略された形となっていることに注目され、それが孔子の禮のあり方とされる。晩年の先生は政治の現場から身を引かれ、春秋や易を注され學（教育）に向かわれていた。哀公と季康子も先生が顏囘を高く評価されていたこともその顏囘が亡くなったことも周知のことであった。顏囘を継ぐ者を先生が誰とされるのか二人の間でも気懸かりであり、二人ともがそれぞれに聞いてみた。先生の応えは、顏囘の前に顏囘無く、顏囘の後に顏囘無し、二人は先生の哀しみの深さを知ることとなる。

読書会：孔子の学を継ぐものがあるとすれば、顔回しかいないと判断があり、その顔回が先に死んだということは、後継が断たれたということ。老荘思想における荘子のように、顔回が生きていて孔子の学を伝えたとするなら、論語は存在しえたであろうか？先生の言葉を確かめ合って残すという方向において、先進の影は薄く、曽子や有子やその弟子達が中核となった。まさかこんな形（論語）で後世自分が伝えられるなんて孔子は夢にも思わなかったでしょう。また、哀公、季康子、君主も宰相も、孔子の学団の将来がどうなるかを非常に気にしており。自国の人ばかりでなく他国からも、どうなるの？と聞かれれば、どう応えてよいか、少なくとも孔子本人はどう思っているのか確かめておく必要はあったのだろう。

７）顏淵死顏路請子之車以為之椁子曰才不才亦各言其子也鯉也死有棺而無椁吾不徒行以為之椁以吾從大夫之後不可徒行也

yán yuān sǐ yán lù qǐng zǐ zhī chē yǐ wéi zhī guǒ zǐ yuē cái bù cái yì gè yán qí zǐ yě lǐ yě sǐ yǒu guān ér wú guǒ wú bù tú xíng yǐ wéi zhī guǒ yǐ wú cóng dà fū zhī hòu bù kě tú xíng yě   
顏淵死す。顏路、子の車を請ふ、以てこれを椁と為す。子の曰はく、才も不才も亦た各れ其の子を言ふなり。鯉も死せりが棺有りて椁無し。吾、徒行して以てこれを椁と為さず。以て吾大夫の後に從ひて徒行すべからざるなり。  
   
顏路は顏淵の父、貧しかった。名は無繇（ぶゆう）。孔子に少（わか）きこと六歳。孔子の初期の弟子とされる。孝経、喪親章第十八に｢棺椁（かんかく）衣衾（いきん）を為してこれを挙げ（[web漢文大系](http://kanbun.info/keibu/kokyo18.html)）｣とあり、天子の棺椁は七重、馬王堆一号墓の巨大な棺椁は五層、禮記、月令篇、孟冬（十月）「喪紀をととのえ、衣裳をわきまえ、棺椁（棺は直に屍を収め、椁は棺の外郭をいう）の薄厚、塋（えい；墓地のこと）・丘壟（きゅうろう；丘、塚）の大小・高卑・厚薄の度、貴賎の等級を審らかにす」であり、棺椁を使用する人は、高貴な人。さもなくば、野原に棄て、風化を待ち骨を拾って埋葬するので葬（ほうむる）と言う、のが民。顏路は、不幸短命の息子に死後くらいはまともに暮らさせてやりたいと願ったのか、孔子に車を請い、椁を作ってやろうとした。下に「欲厚葬之」あるごとく門人の意向でもあり、顏路は先生に願い出たのであろう。先生のこたえは意外なものであった。才とは顏淵、不才とは長男の鯉、各（いず）れも自分の子。鯉が死んだとき棺は作ったが椁は作らなかった。それが、身分に相応しいと先生はされたのであろうか？門人三千人といわれ、大夫の後（しりえ）に連なる先生である。その長男に椁を作っておられなかった。大夫の末とはいえ、君命召不俟駕行矣、徒行（とこう）することはできない、吉月必朝服而朝の先生である、車駕することが禮という姿勢は決して崩されなかった。  
読書会：すごくあつかましいお願いで、よくもまあ、何故こんなことが言えたのでしょう？親爺さん一人の意思だけではないでしょう。顔回が入門して先生と弟子の間がなごんだというくらいで、弟子たちにも人望があり、この時は子路も生きており、弟子達がダメもとでもいいから頼んでみろと、“けしかけた”のではないか？自分の子供に椁を作らなかったというのは、子が親より先に死ぬという中国的には親不孝、顔回に対しても、なんでそんな死に方をしたのか、あれほど注意せよ言ったはずだが、という気持があったのではないか。顔回のストイックさと孔子のストイックさというのは、全く正反対のものがある。そこのところは、先生は区別しておられた。禮として徒行できないというのは断り文句。

８）顏淵死子曰噫天喪予天喪予

yán yuān sǐ zǐ yuē yī tiān sàng yǔ tiān sàng yǔ  
顏淵死す。子の曰はく、噫、天予を喪ぼせり、天予を喪ぼせり  
   
顏淵が死んだと先生に知らせが来たとき、先生は噫yīと声を発された。額に手をあて、驚き、呆然、怒りの入り混じった声が頭頂を抜けた。そして、二度、自分に言い聞かすように申された。tiān sàng yǔ天喪予。顏淵が死んだのは、哀公の十四年(BC491年) とされる。41歳。長男鯉はその二年前に亡くなっていた。血を継ぐべき子に先立たれ、その学（道）を継ぐべき弟子に先立たれる。天に意があるとするなら、これは一体何を意味するのか？天生德於予桓魋其如予何（[述而篇22](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/jutsji.htm)）と自負されていた先生にとって、それは天が自分を見限ったことを意味したのであろうか？何が天意にそぐわなくなったのか？しかし、もし、二人、そして子路が先に死ななければ、子貢が6年も喪に服す事も、有子が後釜にかつぎ出されることも、弟子たちが先生の語録を集めて編纂するといふこともなかったのかもしれない。さすれば、論語は生まれることはなかった、のかもしれない。まことに、天意図り難し。  
読書会：噫yīは言葉でなく発音、もれる音、最高の悲しみ、喪予というのは、一番悲しいときにいう、諺に喪予之痛という、論語の中で一番悲しいところ。中国では子と愛将が死んだとき、将を痛むことがある、自分の子より、顔回の死をいたんだ。顔回と孔子の性格は正反対くらい異なる。他の弟子は聞いてくるので、触発されることもあり、それは孔子も楽しかったが、顔回にはそれがなく、言わなくても分かる安堵があった。その精神的バックアップ、自分を支えるものを失い、そこに噫yīと声がもれた。顔回は学の人、別の弟子は別の仕事をしている、顔回だけでは孔子を継ぐことはできまい。

９）顏淵死子哭之慟從者曰子慟矣曰有慟乎非夫人之為慟而誰為

yán yuān sǐ zǐ kū zhī tòng cóng zhě yuē zǐ tòng yǐ yuē yǒu tòng hū fēi fú rén zhī wéi tòng ér shuí wéi   
顏淵死す。子、これを哭し、慟す。從者曰く、子慟せり。曰はく、慟せりか、夫の人の為に慟すること非ずして、誰に為す。  
   
弔問の禮に哭（こく）と慟（どう）がある。死者との関係で慟するのは近親者の禮とされる。哭は声を発して哀しむこと、慟は身を震わせて泣く事。喪祭のときには哀哭に声のよいものが選ばれた（字統）とある。顏淵の弔問にあたり、先生は哭すばかりか、慟された。禮に反する先生の姿をみた從者、弟子が帰り道で、先生にそのわけを問うた。先生は、慟したか?と問い返し、夫の人、顏淵のために慟するのでなくば、誰に慟するというのか、と申された。義疏や集註では、有慟乎は、孔子自らは気付いていなかったと釈している。しかし、上の句からすれば、哀しみや憤りにあまりあり、禮にかかわらず、慟されたのであろう。  
読書会：孔子は本来なら慟すことはしない、平常心を保つ人、その人が平常心を失ってしまうほど悲しみが深かった。引き継ぐ言葉は人間らしい言葉、精神的ダメージがきつかった。言葉でなくて絶望ですから、身体の方を抑えようとしても抑えきれず慟してしまった。

10）顏淵死門人欲厚葬之子曰不可門人厚葬之子曰囘也視予猶父也予不得視猶子也非我也夫二三子也

yán yuān sǐ mén rén yù hòu zàng zhī zǐ yuē bù kě mén rén hòu zàng zhī zǐ yuē huí yě shì yǔ yóu fù yě yǔ bù dé shì yóu zǐ yě fēi wǒ yě fú èr sān zǐ yě  
顏淵死す。門人これを厚く葬むらんと欲す。子の曰はく、可からず。門人、これを厚く葬むる。子の曰はく、囘や、予を視るに猶ほ父なるに予猶ほ子に視るを得ず。我に非ざるなり、夫の二三子なり。  
   
四度目の顏淵死。さほどに大きな死であった。門人であるが、顏淵の門人とする説、孔子の門人とする説がある。顏淵の父が厚く葬りたいと願っており、その父の思いを適えたいという気持ちがその門人に強かったとみるからである。すでにみたように（[公冶長篇9](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koyacho.htm)）、「吾、回有りてより、門人益々親しむ。」顏淵は人の言う事に静かに耳を傾け、孔門において師と弟子の間の接着剤のごとき位置にもあった。顏淵の門人のみならず、孔子の門人もそう思ったとみていいだろう。ところが先生はそれを不可とされた。財有りて死す者には禮が有るが、財無くして死す者には已む（禮は適用されない）とされたからといふ。しかし、門人はそれに従はず厚く葬った。つまり、椁を作って葬った。これには先生も困ってしまわれた。死せる顏淵、先生を走らせる。自分の子、鯉には禮に従い分相応に椁を作らせなかったが、顏淵には椁を作らせる結果となった。囘は私を父のごとく視ていたが私は囘を子のごとく視ることはできなかった。とは、自分の子のごとく視ていれば、そうはさせなかったといふ。我ではない、夫の二三子がそうした。夫の二三子とは、父の顏路とその門人とされるが、案外、子路や子貢であったやもしれぬ。  
読書会：顔回の死について悲しむのみならず、何でそんな死に方をしたのか、あれほど注意せよと言っておいたはずだが、といった怒りのようなものもあったのではないか？孔子も声を上げて体を揺らして慟哭していたかと思えば、顔回の身分不相応な葬式にたいして、弟子を叱っている。ここはいわゆる孔子の禮の部分でしっかりと正気でいっている。これを孔子のカルテと見立て、このときの孔子の精神状態を分析すればどうなるか、精神病、神経症はないか? 不可の意味がどこまで通じていたか、先生を冷たい人と思うのが普通。そこで不可と筋目を通すということで漢帝国の国教、国家を運営する指針となりえた。違う見方だが、平等にする、父と思うとか子と思うとかそういう特別なことをしない、皆同じ学生、顔回だけ特別扱いはしないということはないか。門人は孔子の門人でなく顔回の門人、門人は主人の埋葬を行うことが重要な仕事。他人の主人を埋葬することはできない、顔回の門人が勝手にやったこと。孔子もそのことにはとやかく言えない立場にあったということか。

11）季路問事鬼神子曰未能事人焉能事鬼敢問死曰未知生焉知死

jì lù wèn shì guǐ shén zǐ yuē wèi néng shì rén yān néng shì guǐ yuē gǎn wèn sǐ yuē wèi zhī shēng yān zhī sǐ   
季路、鬼神に事ふるを問ふ。子の曰はく、未だ能く人に事へず、焉ぞ能く鬼に事ふる。敢へて死を問ふ。曰はく、未だ生を知らず、焉ぞ死を知る。  
   
季路、仲由、字は子路であるが政治に関する場合に季路で登場する。孔子が大司寇となったとき、子路を季氏の家宰として活躍せしめた。その時に季路とでも称されたのであろうか？鬼とは祖先の霊魂、神とは人間でなく、人面蛇身のごとき姿をした神々の霊、ここでは鬼神は祭祀の対象となる祖霊をさすとされる。季氏の宰として季氏の祭祀に預かるに、あるいは魯公の祭祀に参列するに、鬼神に事（つか）ふる心得について先生に問うた。意外な答えが返ってきた。生きている人間に事ふることが出来ずして、祖霊に事ふることができるなど、とんでもない。死んだものにも生きているもののごとく仕えよという風に聞こえた子路は、では、「死とは何ですか？」と問うた。周公の政を復興せんとする先生、現在生きている人間ではなく魯の祖霊の政を目指す先生、やっていることが逆ではありませんか？すると、先生は、生きることが分からないのに、どうして死が分かろうか、と返された。それがうまくゆかないことを悩んでおられる先生、自の志を生ききれていない自分に、死が如何ほどの意味があろうか、と吐きすてられた。

読書会：鬼神については、あまり話がないので載せたエピソード。孔子に軽はずみに死を問うたので、ピシャリときた。答えるはずがない。そいうことがあったから、この会話が残った。鬼神に反対するのではなく、順番のこと。まず、人の仕事、その次に鬼神の仕事をする。孔子は生死を昼夜に例える。生と死は同じことの裏表、一つのことの二つの面。敢問死は英語でいえば、Please allow me to ask death. May I ask you about death? の構文。日本語の敢えてという語感じゃなく、もっと軽い言い回し。子路は学問の順番を知らない、人の事が先と言っている。地上では人間のかかわりなしに、祖先のことを考えることはできない。生死はひとつのもの、地上におれば生。死の方を先に聞くとは日中に夜の場所を聞くようなもの。単に哲学的な問い、死について聞いた。

12）閔子侍側誾誾如也子路行行如也冉有子貢侃侃如也子樂若由也不得其死然

mǐn zǐ shì cè yín yín rú yě zǐ lù hàng hàng rú yě rǎn yǒu zǐ gòng kǎn kǎn rú yě zǐ lè ruò yóu yě bù dé qí sǐ rán   
閔子側に侍る。誾誾如たり。子路は行行如たり。冉有、子貢は侃侃如たり。子、樂しむ。由の若きや其の死然るを得ず。  
   
閔子側（かたはら）に侍（はべ）る。誾誾如は鄕黨篇2）ですでにみた。子路、行行如たりは剛強なこと。行は通常xíng、hàng、hángとなれば、行列、職業、店（銀行）となる。冉有と子貢は侃侃如、これも鄕黨篇2）ですでにみた。子、樂lèは楽しむこと。先生が弟子の個性の違いを楽しむとされる。最近では、然は焉と同じで日本語では訳す必要は無いとされる。由は子路のこと、由の若（ごとき）や其の死を得ずとなるが、その死、然（しか）るを得ず、然りとは寿命を全うすることであり、それができないとなる。魯の哀公十五年（BC480）、子路、衛に死す（[仲尼弟子列伝仲由](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongo3.htm" \l "仲由)）。この現実と照らし合わせて、この時の先生の言葉が思い起こされた。顏淵がここにはおらず、哀公の十四年(BC481年) 以降、魯の哀公十五年（BC480）以前とされるが如何に。もっと、若い時代の雰囲気に思はれる。  
読書会：後に由や喭というのがあるように、行行如たりは言動によほど危ういところがあり、子路の性格が真っ直ぐであるだけに行く末を相当心配しておられた。衛の霊公が亡くなった時、孫の輒か出奔していた父（蒯聵）を立てるかで、どちらを補佐されるかという話があった。子貢が伯夷、叔齊を持ち出し先生の意向を探り、どちらにも味方されないと判断を下していた。子路は先生仕官のラストチャンスとして出公（輒）を立て政権に入ることを勧めたが先生は“名正しからざれば”とそれを受け入れられなかった。子路と孔子の間に気持ちの行き違いが生じていたと思う。子路には複雑な思いがあり、だったら先生どうなんですか・・・先生がやらないなら私がやりましょう、という気持ちがあったのだろう。

13）魯人為長府閔子騫曰仍舊貫如之何何必改作子曰夫人不言言必有中

lǔ rén wéi cháng fǔ mǐn zǐ qiān yuē réng jiù guàn rú zhī hé hé bì gǎi zuò zǐ yuē fú rén bù yán yán bì yǒu zhòng   
魯の人長府を為る。閔子騫が曰く、舊貫に仍らば之を如何。何ぞ必ずしも改め作らむ。子の曰はく、夫の人、言はず、言はば必ず中る有り。  
  
魯人とは魯の君臣。為は作、長は蔵のこと、府は財貨、帛を蔵すこと。兵器を蔵すを庫といふ。舊貫は旧事、古くからのしきたり、魯で新たな長府を作るという決定がなされたとき、閔子騫がそれを批判した。昔のままでいいではないか。それを評して先生がおっしゃった。夫の人とは閔子騫、いつもは寡黙であるが、言えば、必ず的中する。魯の昭公が長府を作ったのは昭公25年（BC517年）、孔子35歳の時とされる。閔子騫は孔子より15歳若い。となれば閔子騫は20歳となる。魯においては三桓氏、わけても季平子の力が強くなり、左伝（昭公25年）によれば、「先君、襄公の廟で禘祭を挙行しようとすると、万舞を舞う者（六佾：48人）が二人しかおらず、大多数は、季氏の廟での万舞に参加した。」とあり、この状況に対応すべく長府を作り、この年9月に長府に入り、季氏を攻めている。結果的には、昭公はこれに失敗して、この年に斉に亡命し、孔子も昭公を追って、斉に亡命している。長府を作ることは、増税を意味し、必ずしも君の勢力増強につながらず、閔子騫の懸念が当たった。先に、定公十四年（前496年）に孔子が魯を去る前に入門した者を先進とみていたが、昭公25年（BC517年）亡命前からかなりの弟子がいたことになる。  
読書会：閔子騫をほめながら自分も同意見、暗に批判している。

14）子曰由之瑟奚為於丘之門門人不敬子路子曰由也升堂矣未入於室也

zǐ yuē yóu zhī sè xī wéi yú qiū zhī mén mén rén bú jìng zǐ lù zǐ yuē yóu yě shēng táng yǐ wèi rù yú shì yě   
子の曰はく、由の瑟、奚ぞ丘の門に於て為さむ。門人子路を敬せず。子の曰はく、由や、堂に升るも未だ室に入らざるなり。  
   
由は子路のこと。子路の瑟とは、家語に、「子路の瑟を鼓するに、北鄙殺伐の聲有り。」とあり、その性格が演奏にあらわれ、壮気がある、あるいは不得其死然の音がする、とされる。奚為（いずくんぞなす）とはどうにもならないこと。丘之門、孔門においては、武を用いることをよしとしない。門人は子路を敬していなかったといふ。顏淵は慕われたようであるが、子路は敬遠されていたようである。先生のこの言葉によって、決定的となった。では、子路が孔門にいる理由は？棟下に窗戸（窓）がありその窓の内が室で窓の外が堂。先生の学堂に升（のぼ）っているが先生の室には入っていない。顏淵は入室したとされる。集註は「子路の學、已に正大高明の域に造れり。特（ただ）未だ深く精微の奥に入らざるのみ。未だ一事の失を以て遽（すみや）かに之を忽（おろそか）にす可からざるなり」と評している。同篇19）に不踐迹亦不入於室とあり、そこで再考してみよう。  
読書会：門、堂、室は物質的な順番でなく、音楽のレベル。堂で弾くレベルであるが室で弾くレベルじゃない。門は家の門ではなく、門人の門。私の弟子だろうか。こんな下手か。それを聞いた弟子が先生は子路のことを軽蔑しているように聞こえた。次は弁解した形、堂は門人、自分の中に入っているから尊敬しないのはおかしい。

15）子貢問師與商也孰賢子曰師也過商也不及曰然則師愈與子曰過猶不及

zǐ gòng wèn shī yǔ shāng yě shú xián zǐ yuē shī yě guò shāng yě bù jí yuē rán zé shī yù yú zǐ yuē guò yóu bù jí   
子貢問ふ。師と商や孰か賢れる。子の曰はく、師や過ぐる。商や及ばず。曰く、然らば則ち師愈れるか。子の曰はく、過ぐるは猶及ばざる。  
   
師は子張、商は子夏。子貢は先生がこの若き二人をどうみておられるかを問うた。孰（いづれ）が賢（まさ）れるか?賢さについての先生の見解はいかなるものか？先生は師は過、商は不及とおっしゃられた。[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、「子張は才高く意廣くして、苟も難きを爲すを好む。故に常に中に過ぐ。子夏は篤く信じ謹んで守りて、規模狹く隘（さみ）し。故に常に及ばず。」愈は、～は～よりましの義。子貢は、といことは、つまりは、師のほうがましとおもっておられるのかと念をおしてみた。先生の意向はそうではなかった。通常、過きたるは及ばざるがごとし、と訓じられる。過ぎるくらいなら及ばぬ方がまし、といふことではない。猶は、まるで～のようである。過とはまるで不及のようなもの、どっちもどっち、過ぐるは改めねばならず、及ばざれば励まねばならぬ。集註は、「道は中庸を以て至れりと爲す。」と述べている。  
読書会：バランス論、やりすぎは足りないのと同じ。日本人は控え目であることがよくて過ぎたるを悪いと見るが、子貢が逆に見ているのは国民性の違いがでている。十哲には師（子張）でなく商(子夏)が入っている、結果的には及ばずの方が入っている。

16）季氏富於周公而求也為之聚斂而附益之子曰非吾徒也小子鳴鼓而攻之可也

jì shì fù yú zhōu gōng ér qiú yě wèi zhī jù liàn ér fù yì zhī zǐ yuē fēi wú tú yě xiǎo zǐ míng gǔ ér gōng zhī kě yě   
季氏、周公より富めり。而して求やこれが為に聚斂してこれに附益す。子の曰はく、吾が徒に非なり、小子、鼓を鳴らしてこれを攻む可きなり。  
   
過ぎるとは何か？冉求のケース。季氏が魯の祖、周公より富を得ている。而（しこう）して求といえば、之とは季氏、季氏の為に、聚斂とは多額の税を取り立てること、それで季氏に附益（ふえき）せしめている。自らの才を示すために必要以上のことを行っている。先生は求は吾が徒に非ず。小子とは孔門の弟子達。鼓を鳴らして求を攻めたてるべきであるとおっしゃられた。[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、「門人をして其の罪を聲（なら）して以て之を責めしむなり。」と述べている。左伝、哀公十一年（BC484年）季康子は、田土の広さに応じて課税しようとして、冉有に孔子の意見を聞かしめたところ、孔子は三度「知らない」と返答をしなかった。内々に聞くと、「施政は禮を基準にして、施捨は手厚く、使役はほどほどに、徴税は薄くすれば旧来の法で十分。禮を外（はず）れて貪欲に任せれば、いくら課税しても不足する。周公の典章を守らず思いつき施政をするなら、いくら尋ねられてもどうしようない。勝手になさい。」という風なことを述べたと伝えている。季康子はこれを取り入れなかったといふ。魯に帰国する前年であり、魯にいる求を攻めよと激烈な言葉となった。  
読書会：鼓を鳴らして戦するとは正義の戦をするということ。一つは魯公より季氏が豊かになっていること、一つは周公の法を曲げていることに加担していることに非を鳴らしている。孔子の場合は現場からは外れているが、求の場合は、政治の現場にあって、流れに逆らうことはできない。

17）柴也愚參也魯師也辟由也喭

chái yě yú shēn yě lǔ shī yě pì yóu yě yàn  
柴や愚、參や魯、師や辟、由や喭。  
   
柴、姓は高、字は子羔。參、姓は曾、字は子輿、曾子のこと。師、姓は顓孫、字は子張。由、姓は仲、字は子路。名前を呼び捨てにできるのは孔子であり、子曰は意識的に省かれている。論語を編纂した弟子達もあまりに厳しい言葉であり、先生にも先輩にもはばかられた。愚とは、[義疏](http://www.minlun.org.tw/2pt/2pt-2-1/11.htm)では王弼の説として「仁を好みて過ぎるなり」、[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)では「知足らずして厚きこと餘り有るなり。」魯とは、義疏では王弼の説として「質文に勝るなり」、集註では「鈍なり。故に其の學ぶこと確（かた）し。能く深く道に造るの所以なり（尹氏曰）」辟とは、義疏では王弼の説として「過差（失）を飾るなり」、集註では「容止（たちいふるまい）に習いて、誠實少なきを謂うなり。」喭とは、義疏では王弼の説として「剛猛なり」、集註では「粗俗なり。」「吳氏曰く、此の章の首（はじめ）、子曰の二字を脱す、と。或ひと疑うらくは、下章の子曰は、當に此の章の首に在りて、通じて一章と爲すべし、と。」  
読書会：これらの性格は、孔子自体がそうというか、紙一重。愚は、大智如愚、見かけは愚であるが非常にクレバー。小さいことに気を使わず、大きな、重要なことにはクレバー。魯はとても正義感があるというほめ言葉、クレバーじゃないがとても正しい人の感じ、志の高い人。辟はほめ言葉ではない。辺鄙な所、学問でいえば、中心でなくて、辺鄙な所の学問、学問の理解が“づれ”ていること。この三つは今でもよく使われるが、喭は使はれない。

18）子曰囘也其庶乎屢空賜不受命而貨殖焉億則屢中

zǐ yuē huí yě qí shù hū lǚ kòng cì bú shòu mìng ér huò zhí yān yì zé lǚ zhòng   
子の曰はく、囘や其れ庶きか、屢空し。賜は命を受けずして貨殖せむ。億れば則ち屢中たる。  
   
集註は、「庶（ちか）いは近いなり。道に近きを言うなり。屢空しは、數々(しばしば)空匱に至るなり。貧窶を以て心を動かして富を求めず。故に屢々空匱に至るなり。其の道に近く、又能く貧に安んずるを言うなり。」と釈す。顔囘は完全に近い、聖人は道を庶幾し（こいもとめ）財を求めることはない、とされる。しかし、素直によめば、囘も其庶乎（似たり寄ったりだ）屢空（しばしばすっからぴん）。其庶几乎とは、だいたいそんなところであろうか(中日大辞典)。庶は嫡子に対する庶子、嫡庶の庶で正統でないこと、ほぼ近くともそのものではないものを指す。先生は顔囘の生き方にも偏ったところがあり、危惧されたのであろう。賜（子貢）もその対極で似たり寄ったりといふ。不受命而貨殖とは、秘かに貨殖したといふことであろう。当時の商業は官営であり他国との取引などは個人的に行うことは出来ないが、下克上の世にあって隙間がうまれていたのであろう。子貢は外交交渉などの折に、儲かりそうな物資にめぼしをつけて秘かに動かしていたのであろう。それがよく当たり大儲けし、孔子の放浪の旅の資金源ともなっていた。先生からすれば、これも、偏った生き方になる。しかし、先生はそこには、自分にないすざまじい生き方があることも認めておられたのであろう。集註は、「命は天命を謂う。貨殖は、貨財生殖するなり。億は意（おも）い度（はか）るなり。言うこころは、子貢顏子の貧に安んじ道を樂しむに如かず。然れども其の才識の明らかなる、亦能く事を料（はか）りて多く中（あた）るなり、と。程子曰く、子貢の貨殖するは、後人の財を豐かにするが若きに非ず。但此の心未だ忘れざるのみ。然れども此れ亦子貢少（わか）かりし時の事ならん。性と天道とを聞くに至りては、則ち此を爲さざらん、と。」命を天命あるいは孔子の命とみるには無理がある。  
読書会：庶は道に近い、もう少しで至る。命は天命、生まれつきの才ということでなく、知能、才能を生かしてお金を儲けた。対照的な二人、一長一短、顔回が素晴らしいといえども短命、生きる力が弱い。子貢は完全に近くないかもしれないが、生きてゆく力を持っている。

19）子張問善人之道子曰不踐迹亦不入於室

zǐ zhāng wèn shàn rén zhī dào zǐ yuē bú jiàn jì yì bú rù yú shì  
子張、善人の道を問ふ。子の曰はく、迹を踐まず。亦室に入らざる  
   
子張が善人の道を問うた。子張は才高く意廣くして、常に中に過ぐ、とあった。善人のタイプではない。子張にすれば、善人の道といふのは面白味がない。迹（あと）を踐（ふ）まずば、亦（また）、（堂に升るのみで）室に入らざると返ってきた。私の辿ってきた過程を追体験しなければ、私の部屋の前の堂に昇ることはできても、室に入ることはできない。集註は、「善人は、質美しくして未だ學びざる者なり。程子曰く、迹を踐むは、途に循い轍を守ると言うが如し、と。善人必ずしも舊迹を踐まずと雖も、而して自ら惡を爲さず。然れども亦聖人の室に入ること能わざるなり。張子曰く、善人仁を欲して未だ學に志さざる者なり。仁を欲する、故に成法を踐まずと雖も、亦惡を蹈まず。諸を己に有すればなり。學ばざるに由る、故に自らして聖人の室に入ること無し、と。」善人は聖人ならず、仁を欲して學ぶ志とそれを実行に移すことがなければ、室には入れないとする。先生は、子張にそのようなことが言いたかったのであろうか？善人の道でなくとも道はあると思う子張に、先生は、それを尋ね辿らぬならば、私の室には入れまいよ、と突き放された。  
読書会：善人はプラスイメージ、室に入らずは、正門の高いレベル。善人の道だけでは足りないと言ったことになる。迹はプラスイメージでは古からの道を学ぶこと、マイナスイメージでは悪いことをしないとなる。古の道を学ばないと深いところには行けない。善人は素直な良さ、孔子はそれだけではダメで学ばねばならないとした。

20）子曰論篤是與君子者乎色莊者乎

zǐ yuē lùn dǔ shì yǔ jūn zǐ zhě hū sè zhuāng zhě hū   
子の曰はく、論の篤き是に與するは君子者か、色莊者か。  
   
集註は、「但其の言論の篤實を以てして之に與（くみ）せば、則ち未だ其れ君子者爲らんか、色莊者爲らんかを知らず、と。言貌を以て人を取る可からざるを言うなり。」と釈する。論篤とは、論じる事、言葉を謹しみて選び、敬して述べること、言い換えれば、善人之道と通じる。では、ただひたすらに善人之道を尋ね辿ればいいのか？與yǔで、仲間に入れる、親しむ、賛成する義、是は君子者であろうか色莊者であろうか? 色莊者は顔色が荘厳なこと。ここにきて、善人之道といえど、（諸国を放浪してまで）私の追い求めたことを学ぶことなくしては、私の室に入ることはできない、となるのではなかろうか。  
読書会：善人とは正反対のイメージ。論篤とはフリをするのが上手い者。みせつけが上手いのは言葉巧みなこと、善人とはそういうものではない。色莊者、に重きがあり、論篤～色莊者となる。

21）子路問聞斯行諸子曰有父兄在如之何其聞斯行之冉有問聞斯行諸子曰聞斯行之公西華曰由也問聞斯行諸子曰有父兄在求也問聞斯行諸子曰聞斯行之赤也惑敢問子曰求也退故進之由也兼人故退之

zǐ lù wèn wén sī xíng zhū zǐ yuē yǒu fù xiōng zài rú zhī hé qí wén sī xíng zhī rǎn yǒu wèn wén sī xíng zhū zǐ yuē wén sī xíng zhī gōng xī huá yuē yóu yě wèn wén sī xíng zhū zǐ yuē yǒu fù xiōng zài qiú yě wèn wén sī xíng zhū zǐ yuē wén sī xíng zhī chì yě huò gǎn wèn zǐ yuē qiú yě tuì gù jìn zhī yóu yě jiān rén gù tuì zhī   
子路問ふ。斯を聞くままに諸を行はむ。子の曰はく、父兄在す有り。これを如何、其れ斯を聞くままに之を行はむ。冉有問ふ。斯を聞くままに諸を行はむ。子の曰はく、斯を聞くままに之を行なへ。公西華が曰く、由や斯を聞くままに諸を行はむと問ふに、子、父兄在す有りと曰へり。求や斯を聞くままに諸を行はむと問ふに、子、斯を聞くままに之を行なへと曰へり。赤や惑へり敢へて問ふ。子の曰はく、求や退く故に之に進む。由や人を兼ねる、故に之を退く。  
   
聞けば即実行するのが子路であった。孔子が筏に乗って東海へ行きたいといえば、即筏を探す。うっかり言ってしまうとその線で走り出す子路であり、それが本心でなくばあわてて否定をしなければ、大変なことになる。筏が来てから、いや本当はそうでないといえば子路を騙したことになる。これほどにすざまじい反応をする子路であるから、人は子路を騙す事ができなくなる。しかし、先生はこれも偏っていると思っておられた。相手の意向を確かめることを求めておられた。そこで、父兄在(ま)す、父兄の意見を聞いてみる、こう聞いたがこう行ってどうであろう？家においては父兄、外にあっては上司や師、人の意見を聞いてみなさい、とおっしゃられた。冉有には聞いたとおり行いなさいとおっしゃられた。公西華が由（子路）が聞斯行諸と問ふと、先生は有父兄在とおっしゃられ求が聞斯行諸と問ふと先生は聞斯行之とおっしゃった。赤（公西華）は惑っております、敢へて問ふと、先生は求は退（しりぞ）く。故にそう進めた。由は人を兼（か）ねる、故にそれを退（さ）けた。兼人を集註は、「人に勝らんとすることを謂う。」義疏は、「率爾（人に率先すること）を好む」とする。これも過猶不及。冉有は以降この性格を自覚し、季康子の宰となり（子貢にそれは先生を魯に呼び戻すために辞退せよと止められたのであるが）、孔子から幾多の叱責を受けながらも、公西華に乘肥馬衣輕裘させたり、斉との戦で功をあげ、軍事のことを先生に習ったとして、孔子を魯に呼び戻すなど、“退”を克服していった。一方、子路の兼人は生涯変わることなく、衛では「禄をいただく以上災難を避けるわけにはゆかぬ」と、子羔が「間に合わぬ」と城外にでるのも、門番が『入っても無駄」と止めるのも聞かず、使者の出た隙間から張り込み、結局は討ち死にする。左伝（哀公16年：BC479）は、「孔子は衛の乱を耳にし、“柴（子羔）はきっと来るが、由は死ぬだろう”と言った」と記している。  
読書会：公西華がどうしてここでこんな分かりきったことを聞くのか。何を聞いたときのことか？何故分かりきったことを聞いたのか？二つとも大きな問題。義に関することを話していたときのことだろう、八佾篇で季氏が泰山で祭りをするのを孔子は冉有に阻止せよと叱ったことがあった。冉有は、結局出来なかった。赤は後進、これから政治の場に出てゆこうとして、先輩の子路のようになろうか、冉有のようになろうか迷っていた、これを聞いて自分がどうすればよいのかますます迷ったのではないか。

22）子畏於匡顏淵後子曰吾以女為死矣曰子在囘何敢死

zǐ wèi yú kuāng yán yuān hòu zǐ yuē wú yǐ rǔ wéi sǐ yǐ yuē zǐ zài huí hé gǎn sǐ   
子、匡に畏る。顏淵後れたり。子の曰はく、吾、女を以死せりと為す。曰く、子在ます、囘何ぞ敢へて死せん。  
   
子畏於匡は、[子罕篇5）](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/sikan.htm)にもあった。文王の文は予にあり、その予を匡人がどうすることができよう、というものであった。ここでは、顏淵が後（おく）れてたどり着いた。女（なんじ）は来ないものだから巻き込まれて死んだものと思っていた、といふくらいであったから相当危うい状況であった。陽貨と間違はれたときである。先生が生きておられるというに、どうして私が死ねましょうか、という顔囘のこたえであった。結果的には、そう思っていた顔囘が先に死んだ、これは一体どう考えればいいのか？[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)では、「鬭いに赴き死を必とせんやと謂う」つまり｢夫子不幸にして難に遇わば、囘必ず生を捐（す）てて以て之に赴かん。生を捐てて以て之に赴き、幸にして死せず。則ち必ず上天子に告げ、下方伯に告げ、討たんことを請うて以て讐を復いん。但には已むまじきぞ。夫子而して在せば、則ち囘何爲れぞ其の死を愛（おし）まずして、以て匡人の鋒を犯さんや。」とある。先生の難には命を捨てて立ち向かい、先生に万一のことあれば、復讐して果ててみせる。しかし、先生は生きておられるのであるから、どうして死をかけて匡人の鋒（やいば）を侵（おか）さねばならぬのか、犬死などしません、とでもなろうか。[義疏](http://www.minlun.org.tw/2pt/2pt-2-1/11.htm)によれば、晩年の顔囘の死は、天が孔子を喪（ほろぼ）すこと、孔子の学の断絶である。しかし、この時点では、顔囘はその域に達しておらず、孔子はその死を危惧したのみ、自分の死が即ち文王の文の断絶、というのが当時の孔子の意識と見る。先生が生きておられる以上、それを引き継ぐ事が出来るように学ぶのが顔囘の夢であり、死んでなどおれようか、となろうか。 それ以降の顔囘の発憤があって、室に入ることができた。  
読書会：これは弟子たちと一緒に行動していて、大人数では危ないということで別々に旅をして、鄭で会おうと約束して、孔子がその場所に着いた時の姿があまりに惨めであったのを見て、まるで、喪家の犬のようだと評されたときのこと。相当の危機だったのでしょう。激しい感情、人間性の裏に秘められているものをみせた、師との人間味あふれる、顔回の激しい気持ち。貝塚先生は、同性愛に近いものと言っておられる。論語のなかでは、顔回の評価は一定しており、ここで顔回が発奮したというものではない。論語が弟子によって編纂された時点では、かなり時間がたっており、歴史的な解釈とは異なるイメージであった。

23）季子然問仲由冉求可謂大臣與子曰吾以子為異之問曾由與求之問所謂大臣者以道事君不可則止今由與求也可謂具臣矣曰然則從之者與子曰弒父與君亦不從也

jì zǐ rán wèn zhòng yóu rǎn qiú kě wèi dà chén yú zǐ yuē wú yǐ zǐ wéi yì zhī wèn céng yóu yǔ qiú zhī wèn suǒ wèi dà chén zhě yǐ dào shì jūn bù kě zé zhǐ jīn yóu yǔ qiú yě kě wèi jù chén yǐ yuē rán zé cóng zhī zhě yú zǐ yuē shì fù yǔ jūn yì bù cóng yě   
季子然問ふ。仲由、冉求は大臣と謂ふ可きか。子の曰はく、吾、子を以て異なるを之問ふと為す。曾ち由と求とを之問ふ。所謂る大臣は、道を以て君に事へ、不可なれば則ち止む。今、由と求や具臣と謂ふ可し。曰く、然らば則ち之に從はむ者か。子の曰はく、父と君を弒せむには亦從はざる。  
   
意味の分からぬやりとりである。季子然が「仲由と冉求は大臣級でしょう。」と先生に問うた。先生は、「子（貴方）は異（変）なことをお聞きになられる、由と求のことをお聞きになりたいのか？大臣は道を以って君に仕えるもの、それができなくば止（と）めるもの。今の由と求は（君が道をはずれても、止めることもできぬ）具臣というべきもの。」と応えると、子然はこう切り返した、「然らば、言う事に從ふ者といふか。」先生は、「父と君を弒すとあらば從ひませぬ。」とおっしゃられた。子然はこのことで名を残すことになったが、季氏の子弟、としか分からない。一体何が問題となっているのか？古来、仲由と冉求の「二子を臣として得ることを多とす。故に之を問えり。」この場合どちらがふさわしいかを問う、となろうが「大臣でもない二人をそう称すことが異之問（義疏）」「二子を輕んずるは、以て季然を抑えんがためなり（集註）」ではつながらない。「今由與求也可謂具臣」とあり、二人とも仕えているとみなすべきであろう。季桓子の時なら孔子が大臣で子路が季氏の宰であり質問内容にそぐわない。季康子の時は冉求が季氏の宰、仲由が衛の出公に仕える前に季氏に仕えていたのであろうか？いづれにしても、孔子が在魯の時のこと。この二人が 季氏の政治を正すことができないのを孔子は苦々しく思っておられた。子然は仲由と冉求が自分の思い通りに従はないところがあり、まるで大臣のごときだと言った。先生は大臣というものを考え違いしてますよ。そんなことを聞きたいのではないでしょう（この二人を上手く使うためのヒントが欲しいのでしょう）。土台無理な相談（季氏が道を行えば二人は大臣の働きをするでしょう）、止めることすらできぬでは具臣、と具臣という言葉がでたのを子然がとらえて、先生は二人を具臣と言っておられた、汝等は具臣、私に従っていただきましょう、とこれを口実にせんとした。先生はこれは全然つうじておらぬ、と無道なものには従うことなし、と話を切られた。  
読書会：季子然は何で来たのか？二人揃えていることを言いに来る？つまらんことを聞く。自分のところへ来るのであれば、もっと大事なことを聞くべきでは、というのが孔子。大臣は魯の王に仕えるものであって、大臣が季氏に仕えるものではない。二人は仕方なく季氏に仕えているが魯の王に背くようなことはしない、それくらいの哲学は持っている。そんなことは分かりきったことで、孔子にしてみれば、心の中では私という人間がいるではないかと思っている。ずいぶん皮肉めいたものの言い方。がっかりしている。

24）子路使子羔為費宰子曰賊夫人之子子路曰有民人焉有社稷焉何必讀書然後為學子曰是故惡夫佞者

zǐ lù shǐ zǐ gāo wéi bì zǎi zǐ yuē zéi fú rén zhī zǐ zǐ lù yuē yǒu mín rén yān yǒu shè jì yān hé bì dú shū rán hòu wéi xué zǐ yuē shì gù wù fú nìng zhě   
子路、子羔をして費の宰為らしむ。子の曰はく、夫の人の子を賊なはむ。子路が曰く、民人有り。社稷有り。何ぞ必ずしも書を讀みて然して後に學と為せん。子の曰はく、是の故に夫の佞者を惡む。  
   
子路が子羔をして費の宰にした。費（[地図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/mapro.htm)）は季氏の本拠地で堅固な城壁に囲まれた重要拠点。費の宰がここを掌握して季氏に背き魯の実権をも手中にするという邑。[雍也篇7）](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/yoya.htm)で季氏が閔子騫を費の宰にしようとして断られた話があった。閔子騫は孔子より少きこと15歳であった。子羔は孔子より少きこと30歳、子路は9歳少いから子路より21歳少い。子路が費の宰となったのは定公12年45歳、子羔は24歳。同年代では、顔回、子貢、冉求となる。季氏から指名されるくらいなら、こっちから閔子騫の代わりを出してやる、「子羔、お前がやれ」、と子路が決断したとみてみよう。司馬遷は、子羔を「長（たけ）五尺に盈（み）たず。業を孔子に受ける。孔子以って愚となす。」と記している。先生は子路の抜擢に、子羔を賊（そこ）なふのではないかと不安を覚えてやめようとされた。先生は小男ということにもこだわる、後に、澹臺滅明のことでも外見にこだわって失敗している。心配する先生に子路が言い放った。（費には）民人もおれば、社稷もある、讀書するだけが學ぶにあらず。弟子入則孝出則弟謹而信汎愛衆而親仁行有餘力則以學文（[學而篇6）](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gakuji.htm)）とは先生の言ではござらんか。惡たらしくも弁のたつ子路の奴め、と黙りこんだ先生であった。子羔はその役割を果たしたのであろう。子路は晩年衛において、その子羔が引き止めるのも聞かず城門に入って命を落とすことになった。  
読書会：費は季氏の砦、閔子騫が逃げたのはそれが気に入らなかった。民の上に立つものは行政とともに禮が必要。民の上に立つと下手をすれば下にも及ぶ、孔子はそれを恐れた。子路は実地教育で行けるとするが孔子からすれば学ばなければならない。孔子は学問、政治、子路は学問より政治、あの時代は子路と同じ順番の役人が多い。孔子と同じ順番の人は少なく、孔子はとても残念で、怒っている。

25）子路曾晳冉有公西華侍坐子曰以吾一日長乎爾毋吾以也居則曰不吾知也如或知爾則何以哉子路率爾而對曰千乘之國攝乎大國之閒加之以師旅因之以饑饉由也為之比及三年可使有勇且知方也夫子哂之求爾何如對曰方六七十如五六十求也為之比及三年可使足民如其禮樂以俟君子赤爾何如對曰非曰能之願學焉宗廟之事如會同端章甫願為小相焉點爾何如鼓瑟希鏗爾舍瑟而作對曰異乎三子者之撰子曰何傷乎亦各言其志也曰莫春者春服既成冠者五六人童子六七人浴乎沂風乎舞雩詠而歸夫子喟然歎曰吾與點也三子者出曾晳後曾晳曰夫三子者之言何如子曰亦各言其志也已矣曰夫子何哂由也曰為國以禮其言不讓是故哂之唯求則非邦也與安見方六七十如五六十而非邦也者唯赤非邦也與宗廟會同非諸侯而何赤也為之小孰能為之大

zǐ lù zēng xī rǎn yǒu gōng xī huá shì zuò zǐ yuē yǐ wú yī rì zhǎng hū ěr wú wú yǐ yě jū zé yuē bù wú zhī yě rú huò zhī ěr zé hé yǐ zāi zǐ lù shuài ěr ér duì yuē qiān shèng zhī guó shè hū dà guó zhī jiān jiā zhī yǐ shī lǚ yīn zhī yǐ jī jǐn yóu yě wéi zhī bì jí sān nián kě shǐ yǒu yǒng qiě zhī fāng yě fū zǐ shěn zhī qiú ěr hé rú duì yuē fāng liù qī shí rú wǔ liù shí qiú yě wéi zhī bì jí sān nián kě shǐ zú mín rú qí lǐ yuè yǐ sì jūn zǐ chì ěr hé rú duì yuē fēi yuē néng zhī yuàn xué yān zōng miào zhī shì rú huì tóng duān zhāng fǔ yuàn wéi xiǎo xiàng yān diǎn ěr hé rú gǔ sè xī kēng ěr shě sè ér zuò duì yuē yì hū sān zǐ zhě zhī zhuàn zǐ yuē hé shāng hū yì gè yán qí zhì yě yuē mù chūn zhě chūn fú jì chéng guàn zhě wǔ liù rén tóng zǐ liù qī rén yù hū yí fēng hū wǔ yú yǒng ér guī fū zǐ kuì rán tàn yuē wú yǔ diǎn yě sān zǐ zhě chū zēng xī hòu zēng xī yuē fú sān zǐ zhě zhī yán hé rú zǐ yuē yì gè yán qí zhì yě yǐ yǐ yuē fū zǐ hé shěn yóu yě yuē wéi guó yǐ lǐ qí yán bú ràng shì gù shěn zhī wéi qiú zé fēi bāng yě yǔ ān jiàn fāng liù qī shí rú wǔ liù shí ér fēi bāng yě zhě wéi chì zé fēi bāng yě yǔ zōng miào huì tong fēi zhū hòu ér hé chì yě wéi zhī xiǎo shú néng wéi zhī dà

子路、曾晳、冉有、公西華、侍坐す。子の曰はく、吾を以て爾に一日も長せるも吾を以てすること毋れ。居れば則ち曰く、吾を知らずと。如し或ひは爾を知らば則ち何を以てせんや。子路、率爾として對へて曰く、千乘の國、大國の閒に攝れて、之に加ふるに師旅を以てし、之に因るに饑饉を以てす。由や之を為めて三年に及ぶに比んで、勇有りて且つ方なふことを知らしむ可し。夫子、之を哂ふ。求、爾は何如ん。對へて曰く、方六七十、如しくは五六十、求や之を為めて三年に及ぶに比んで、民を足しむ可し。其の禮樂の如きは、以て君子を俟つ。赤、爾は何如ん。對へて曰く、之を能すと曰には非ず。願くば學ばむ。宗廟の事、如しくは會同に端章甫して願くば小相に為らん。點、爾は何如ん。瑟を鼓くことを希み、鏗爾として瑟を舍きて作ちて對へて曰く、三子者の撰に異れり。子の曰はく、何ぞ傷まんや。亦各おの其の志を言ふなり。曰く、莫春には春服既に成る冠者五六人童子六七人、沂に浴し、舞雩に風じて詠じて歸らん。夫子、喟然として歎じて曰はく、吾は點に與せん。三子者出ず。曾晳後れたり。曾晳が曰く、夫の三子者の言、何如ん。子の曰はく、亦各おの其の志を言ふのみ。曰く、夫子、何ぞ由を哂ふ。曰はく、國を為むるに禮を以てす。其の言讓らず。是の故に之を哂ふ。唯求は則ち邦に非ずや。安んぞ方六七十如しくは五六十にして邦に非る者を見ん。唯赤は邦に非ずや。宗廟、會同、諸侯に非ずして、何ぞ赤や之が小為らば孰れが能く之が大為らん。  
  
子路、曾晳、冉有、公西華が侍坐している。曾晳の名は點、曾参（子輿：孝經を作る）の父。先生は、「吾が爾より一日も長しているから吾を以てすること毋れ、私が年長だからといって遠慮することはない。居れば則ち吾を知らずと曰ふ、孔門の中に居ると人は自分のことを知ってくれないと常々こぼしているが、如（も）し或ひは爾を知らば則ち何を以てせんや、誰かがお前を評価してくれれば何を治めることが出来るのか？」とその志を問われた。率爾としてとは、本来なら子路どうかと問われ、起立して、言いたいこと言って良いとの事ですから言わせていただきますが、と前置きして応えるものだが、待ってましたとばかりの、無造作な対応をいふ。無作法とされる。子路が、勢い込んで立ち上がって応えた。千乘之國は戦車千台の国（魯規模の中等国）、その国が他の大國から挟み撃ちに会ふ差し迫った状態にあり、そこに師（二千五百人）旅（五百人）の兵力が差し向けられ、そのうえ（国内では）饑饉という事態にあたって、由はこれを治めてみせましょう。三年たてば(民をして)勇有らしめ、且つ（義に）方（いざ）なふことを知らしめましょう。先生は子路を哂（わら）はれた。にやりと笑うこと。瑟を弾いていた曾晳は別として、冉有、公西華はこの哂いにどう対応してよいか黙ってしまった。先生は今度は、求、爾はどうか？と問われた。對へて曰く、方六七十如（も）しくは五六十(里の国：小国)なら求はこれを治めてみせましょう。三年たてば可民をして足らしめ其の禮樂の如きは以て君子に俟つ、民が生活できるようにしてみせますが、禮樂のことは私の手には負えませんので君子にお任せしたい。先生は何も言わず、赤、爾はどうか？と公西華に答えを求められた。對へて曰く、これが出来るという風なことは言えないので願望ですが、宗廟の事を学ぶ如しくは會同に端章甫して願くば小相をつとめたい、會は諸侯との時見、同は諸侯との衆頫(ちょう：まみえる)、端章は赤黒の礼服、甫は礼冠、小相は儀典長補佐役。これは｢由也千乘之國可使治其賦也不知其仁也求也何如子曰求也千室之邑百乘之家可使爲之宰也不知其仁也赤也何如子曰赤也束帶立於朝可使與賓客言也｣（[公冶長篇8](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koyacho.htm)）と符合する。先生は何も言わず、點、爾はどうか？曾晳に問われた。瑟（しつ）を鼓（ひ）くことを希（や）み、義疏は、鼓は弾、希は疏、先生の問いに応えるため考え事をし、瑟を弾く手が遅くなり、聲が希（かすか）になったと注している。鏗爾（こうじ）として瑟を舍（お）きて作（た）つ、鏗は音が高くしまった調子であるが、ここでは瑟をうちとめる音、作は起、瑟を舍いて起立して對へて曰く、三子者（三先生方：由求赤）の撰（せん）とは異なりますが、と謙って前置きをいれた。撰は三人の具申。先生は、何の傷（いた）みいることがあろう、それぞれがその志を言うのであり、遠慮はいらん、と申されたので、こう続けた。莫春は春三月末とされる。春服既成は天気すでに暖かくなり單袷の衣を着ていること、冠者は成人、童子は未冠者、冠者五六は5ｘ6＝30人、童子六七は6ｘ7＝42、全部で72人で堂に升った弟子のことという説もある。沂は川名、沂水、孔子の家の近くに流れている。風は涼風、舞雩（ぶう）は沂水のほとりの雨乞いの壇、壇上には樹木がある。沂水で浴し、壇に登り、樹下に憩うと涼風が漂う。詠は先王の道を朋友と朗詠すること、そうして孔門に歸る。先生は喟然、ため息をつくこと、歎じて曰く、私は點に與（くみ）する、曾晳の志なら付き合ってもいい、と申された。三子者が出てゆくと、曾晳は後（おく）れた、一人だけ残った。曾晳は、夫三子者の言を先生がどう思われたのか確かめたかった。先生は、各々がその志を言っただけのことではないか、と申された。では、先生は何故由をお哂いになられましたか? 國を為（おさ）めるには禮を以ってせねばならぬのに、其の言は、讓らない、だから哂った。國を為めるには譲るという禮を行わねばならないのに、子路は率爾として他人を押しのけている、おかしいではないか。唯だ求だが、やはり邦じゃないか、方六七十如しくは五六十であって邦でないものどうして見いだせようか。唯だ赤だが、これも、やはり邦じゃないか、宗廟、會同とは諸侯に非らずして何になる。赤を為小（相）にすれば孰が能（よ）く大 （相）為りえようか。求と赤は先生から下問されて対へており、先生が哂ふことはなかったが、いづれも國、邦、諸侯を為めることがその志であった。三人はその才能を十分に備えている、赤は小相どころか大相の器である。孔子が魯に居り、赤が小相を勤める年齢を考えれば、哀公12年（BC483）魯に帰国して以降となろうか、孔子の心は国政を超えた人間としてのあり方を求めていた。  
読書会：これは作り話かもしれない。曾晳が中心で、そのための物語がつくられた。文体、状況設定が違う。先生が評価してくれないと不満をもっていたので、評価してあげるから言いたいことを言ってみたら、というのも作り話っぽい。子路は軍事手腕があり、侵略に対峙することができた。災害あるときは一番大事なのは統率力。子路には軍隊をまとめる力、心を一つにしてどんな状況にも、災害にも対応する自信があった。子路が笑われたのをみて冉有は賢いから控えめに、そして禮樂は君子を俟つとは、孔子に、禮の最高権威は先生なんですからといわんばかり。赤は、更に控えめに勉強させていただきますとし、孔子が礼に厳しいことを重々わかっているので、正装した衣装にこだわることで、その場をくぐりぬけた。孔子が理想を語れというに、子路は正直に答えたが、あとの二人は、そうせずに孔子はその答え方に不満があった。曾晳は他の三人と異なり、政治に参加する人ではない。子の曾参（曾子）の親父であるから入門、付いて来た人で、ここでは初めから瑟を弾いて、BGM代わりにしている。ついでに聞いてみると、他の三人のようには答えられないが、曾晳なりに答えているところが良かった、大人5～6人、これから未来のある学生7～8人と勉強に行きたいとした。それが孔子の気持ちと合致した。言葉どおりだと楽しむことであるが、もう一つを考えれば、政治がよく平和になれば、老子でいうところの最高レベルの政治、国が良ければ私もこうしたいという政治的願望でもある。子路がしゃべった後に孔子が哂ったことが他の二人にショックであった。孔子が人の言うことを哂うことはないので他の二人にプレッシャーとなった。禮と譲が欠けているのが問題なのだが、他の二人は勘違いして、謙遜して邦という言葉を使わず言った、そのこ狡さを孔子は気に喰わなかった。曾晳は自分の器が分かって言っていると孔子は認めた。当時は椅子がなく、あぐらをかいて座り、その上に瑟を置いていたので、それを膝から下ろして、立ち上がった。曾晳が残っている理由は音楽道具を整理するため。曾晳が三人のことを聞く、孔子が何故曾晳にくみしたか分かっていない。分かっていないから聞いた。とても自由な学問の雰囲気があった。　  
  
了　2008.02.02　節分